

検査Ⅰ

時間 四十五分

受検上の注意

1. 解答用紙に、受検番号・氏名を記入してください。
2. 声に出して読むではいけません。
3. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。
方法を誤ると得点になりません。
4. 検査終了後、解答用紙を回収します。

問題は次のページからです。

1 次の文章1と文章2を読んで、あとの問題に答えなさい。

(*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

文章1

私たちの存在は運命として与えられたものです。私たちは生存の条件や環境を自分で選択したわけではなく、自己意識をもった時には既に世界の中に投げ出されていたのであり、その気づきから生き始めなければなりません。しかし、そのことは必ずしも、私たちの人生になんのためにと問われるものがあらかじめ与えられることを意味しません。なんのためにといい問いは、私たちに選択と決断を迫るものであり、私たちはその答えを自分自身で追求していくしかないのです。重要なことは、「なんのために生きているのか」ではなく、「どのように生きていくか」にはかなりません。

このことを考える手がかりとして、*フリードリヒ・ニーチェの自伝『この人を見よ』を紹介します。ニーチェが自身の思索の遍歴と主要な著作について*回顧したこの著作には、彼の思想の*エッセンスがつまっています。題名の「この人を見よ」は新約聖書に由来しますが、注目すべきことはニーチェがこれに「ひとはいかにして本来のおのれになるか」(手塚富雄訳、以下同じ)という副題をつけていることで、この言葉こそが全篇を貫くテーマとなっています。そして、著作全

体は「序言」、「なぜわたしはこんなに賢明なのか」「なぜわたしはこんなに利発なのか」「なぜわたしはこんなによい本を書くのか」「なぜわたしは一個の運命であるのか」の各章から構成されています。著者がこれほど*大言壮語し、*傲慢なタイトルをつけていることに、みなさんはまず驚きと疑わしさを感じることでしょう。

しかし、これらはすべてニーチェの思想的な戦いの証であり、自分がどのように生きてきたかについての痛切な告白なのです。ですからこの著作には、私たちがどのように生きていくかを考える上で*示唆を与えてくれる言葉が満ちています。それらの言葉を通してニーチェは、「ひとはいかにして本来のおのれになるか」というきわめて主体的な問いを私たちに突き付けるのです。

ニーチェのこの問いは、「自分自身を一個の運命のように受けとること、自分が、「別のあり方」であれと望まぬこと」、すなわち「運命愛」によって今の自分自身を全面的に肯定することを、私たちに促すものです。私たちに与えられているのは、現に生きているこの人生だけであり、ほかはなにもありません。そして、そこでなにをなしとげるかは自分自身の生き方によって確認していくしかないのです。今の自分の*境涯を嘆いて「別のあり方」を望んだところで、それは空しいことです。むしろ今の自分を「一個の運命」として決然と受け入れることで、積極的に力強い生き方が可能となります。つまりこ

ここでニーチェが私たちに問いかけているのは、「どのようにしてこの自分を生き抜くか」ということにほかならないのです。

そうした私たちの創造的な生き方を可能にするのは、精神の自由な飛翔であり、それは自分に対する確固たる自信と信頼しんらいによつてますかがやます輝かがやかしいものとなります。「このことができるのはわたしだけだ」と認識する」自由において、私たちはもっとも生き生きとした精神的活動ができるのだと、ニーチェは述べています。さまざま可能性があるなかで、1自らの主体的選択により本来的な自分を切り開こうとするとき、みなさんの未来は実り豊かなものとなり得るのです。「わたしは自分の未来を―ひろびろとした未来を―静かな海を見るような気持ちで見ている」。

(中島隆博・梶原三恵子・納富信留・吉永千鶴子編著 『扉をひらく哲学 人生の鍵は古典のなかにある』から。本文は、木村勝彦による。)

注

フリードリヒ・ニーチェ ― ドイツの詩人、哲学者。

回顧 ― 過去のことを思い返すこと。昔のことに考えを向けること。

エッセンス ― 哲学における、物事の本質。

大言壮語 ― 実力以上に大きなことを言うこと。

傲慢 ― 思いあがって人を見下すことや、その様子。

示唆 ― それとなく指し示すこと。

境涯 ― 人がこの世に生きてゆく上での立場。

「ひとりではない」と感じることもある。

そう感じられることが嬉しい。

10代から20代にかけて、いつも、「ひとりぼっちだ」と思っていた。そのたびに悲しい気持ちになり、周りにたくさんの方がいたにもかかわらず、心はひねくれた。変な理想を掲げ、現実を見ることができず、幸せを感じないように自分を追い込んでいた。「幸せになつてしまつたら良い表現はできない」などと、己の人間性や才能に自信がない自分を正当化するための、言い訳に塗れた情けない理論を掲げたりした。嫌う必要のないものを嫌い、好きでもないものを好きと言つて、人と違うことをアピールしようとした。

そのままの自分を認められない、偽らずにいられない、誰かに馬鹿にされる前に自分で自分のことを悪く言い、「わかってますよ」と傷つかないようにバリアを張った。情けない。そんなことをしていたら、実際にこの上なく幸せな人生だったとしても、幸せな気持ちになつて一生なれないのに。

今はそんなことはまったく思わなくなった。

幸福でありながらも*ハングリーな表現ができる人は本物だと思うようになり、自分の心に偽りなく好き嫌いを感ぜられるようになり、嫌いなもののお話はなるべく心の中だけに留め、極力口にしないように

なり、誰かに馬鹿にされたら、「そうですね」と笑いながら、心の中でただ普通に傷つくようになった。

それが正常、人間こうあるべきだなんて言うつもりはない。自分の性格や環境上、この状態が一番生きることを楽しく感じられるというだけだ。正解は世界中、生きる人の数だけあるのだと思う。

自分はひとりではない。しかしずっとひとりだ。いつの間にかひとりであるということが大前提となつていて、特に意識もしなくなつた。

すると、誰かが手を差し伸べてくれた時、優しくしてくれた時、助言をくれた時、そばにいてくれた時、ひとりではないと思えた時の記憶だけが増えていくようになった。人生のひとりではない瞬間を中心にグロースアップできるようになった。

いのちの車窓は、様々な方向にある。現実は一つだけけれど、どの窓から世界を見るのかでいのちの行き先は変わっていくだろう。

より良い方向を見よう、なんて説教くさい言葉だけれど、それをやり続けるのは難しい。前向きに生きることが、本当に難しい。

予想もしなかったような楽しくて嬉しい終着駅にたどり着けるように、より良い窓を覗いていきたい。それは現実逃避ではなく、現実を現実的に乗り越えていくための、工夫と知恵ではないかと思う。

電車が動き出し、よいいスタートと声がかかる。車窓を見ると、曇天

である空のはるか遠くに、雲の切れ目がぼっかりと開いていた。

クローズアップした僕ぼくの目の中には、見違えるような青空が見える。
この後は晴れである。

(星野源『いのちの車窓から』による)

注

ハンダグリー——今の自分のレベルに満足せずに自分をより高
めたいと強く望むこと。

クローズアップ——特定の事柄ことを大きくとりあげること。

〔問題1〕 傍線部1「自らの主体的選択により本来的な自分を切り

開こうとする」とありますが、このような人生に対する向き合い方を**文章2**の筆者はどのように表現していますか。

文章2の中から三十文字以内で抜き出しなさい。

〔問題2〕 傍線部2「一番生きることを楽しく感じられる」とあ

りますが、そのように感じる事ができる理由を**文章1**の言葉を用いて四十文字以内で説明しなさい。

〔問題3〕 二重傍線部「なにをなしとげるかは自分自身の生き方

によって確認していくしかない」とありますが、あなたはこれからの六年間をどのように過ごしていきたいと考えますか。あなたの考えを四百字以上四百四十文字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の「きまり」にしたがうこと。

条件

① **文章1**・**文章2**に共通する内容を示すこと。

② 目標や将来の夢を設定し、その内容に関連づけて「六年間の過ごし方」を具体的に述べること。

③ 段落分けについては、内容に応じて適切に行うこと。

「きまり」

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○ 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○ 、や、や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます。（まずめの下に書いてもかまいません。）

○ 。と」が続く場合には、同じように書いてもかまいません。この場合、「」で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。

（問題は以上です。）

このページ以降には問題はありません。

